かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

笠岡市田頭の神殿

をやの思いを にをいがけ、

内治(うちうち)に心を配り おたすけに誠の心を尽くそう

1．一歩前進 百万軒
2．おつとめの徹底と ひのきしん
3．機を逃さず おさづけの取次

表紙のことば

明治二十九年から昭和四十六年までの間、笠岡大教会は世界一列救けの教祖の御思いを、此の場所から発信し続けた。大教会の草創、中興の歴史のほとんどは、此の神殿と共に在ったと言えよう。

明治二十八年十二月、二代会長・上原伊助は十日間程 歯痛で苦しんだ。十二月七日、おさしづを願い出た。全文を掲載する。

「さあさあ尋ねる事情事情、どうもこれ一時身上堪いられんと言うなれど、随分萬事事情取り扱え。掛かる理はあろまい。又内々事情互い互い事情以て、日々事情これも鮮やかなるもの。そんだら日々堪いられん事情、どうであろと言う。よう聞き分け。一時の事情一時の事情の一つ、又長らえて又や又やと言うて、日々の処随分送る事情、一時事情と一つ聞き分け。なかなか事情なかなか事情である。ついつい忘れるやろ忘れるやろ。どんな事でも、めんめん事情掛かりて来る。掛かりて来れば、皆心の理によって、満足理である。ついつい治まる。一寸尋ねたら、聞き分け。何も案じる事は、一つもあらせん。ようこれ聞き分け。」

二代会長がその意味を桝井伊三郎先生にお尋ねすると、

「これはなかなか結構なおさしづである。歯の痛む位の事は問題ではない。これは新築の事や。思うていても、しばらくすればすぐ忘れてしまうから、何でも今の時機を失ってはならぬという事やで」とお諭し下さった。

新築工事は明治二十九年二月三日のお許しと共に始まった。「今の時機」は、しかし内務省訓令の最中、工事はまさに徹底的な当局の監視、取り調べの中で行われた。寄付金については講社を戸別訪問してまで調査を受け、建築現場では取り締まりの名のもとに二名の巡査が、常時つききりで出張監視した。

十一月上旬上棟式が行われた。この時三陸地方の津波で死者二万人を越える惨状に二代会長は義捐金を募り、四百円余を災害地に送って、餅撒きは行わない事にしていたが、当日信者から小餅十数石が献納されたので、多数の参拝者の集まる中、誠に盛大な餅撒きが行われた。

奉告祭は十二月十八日行われた。当時の記録によれば、続いて開講祭(十九日)月次祭(二十日)入社祭(二十一日)神霊祭(二十二日)と五日間に亘ったとある。

こうして笠岡地方に類を見ない壮大な神殿が、笠岡の市街を見下ろす龍王山の麓に姿を現したのである。

初代会長はこれより前、明治二十八年四月会長職を伊助に譲ってからは、「伊イさん所へ行け、伊イさん所へ行け」と言って、努めて二代会長に人々の心を向け、また上級・芦津大教会の常詰役員として勤めたが、初代会長室が附属建物の一角に建築されたのは、三代会長時代の大正十一年三月の事であった。今大教会の境内地に移築されている教祖殿、役員住宅と共に建築された初代会長室は、教祖殿横の日当たりのいい部屋だった。昔の先生方が幼い頃、お菓子をねだりに行ったり、窓際に置いて初代が丹精していたカニ欄の花芽を全部摘んでしまったりした部屋だった。「わい、えらい事してしもた。夕べ、カニ欄を外へ置き忘れてしもて、ネズミがつぼみを全部食べてしもた。かわいそうな事したワ」

この教祖殿建築、役員住宅、初代会長室の建築には雅志兄の身上が台となっているが、割愛する。

（史料部長　上原繁道）

信念を持って後継者の育成を

大教会では、二月月次祭講話に替えて、恒例の「学生層育成者講習会」が開催され、本部学担より深谷徳重先生(学生生徒修養会部部長)をお迎えして、「学生層育成の大切さ」・「学生担当委員会の諸活動」などについてお話しいただきたきました。

教祖年祭は、教会長・布教所長に限らず全ての信者が成人させていただく旬ですから、若い学生達も逃していただきたくない。

真柱様は、学生層育成は、にをいがけ・おたすけであり、布教の精神で取り組むようと仰せられます。正に、にをいがけ・おたすけ実動の今の旬は、道の後継者・学生層の育成にも力を入れて取り組むべき旬です。

学担は基本方針として、「お道の素晴らしさ、教祖の御心、たすけ心を学生へ――論達第二号のご精神を学生層に伝え、育成者も共に育つ努力を」と掲げております。

真柱様は、「学生だから、年祭は関係ないと思うかも知れないが、この時に心が成人するように、それぞれの立場に相応しい道の通り方を考え求めてほしい」と、この旬の、学生の成人の努力を促され、また、「育成・丹精は地味で難しいことだが、すべての活動のもとになる。どの会がするというものではなく、それぞれの特性を活かして道のあらゆるところで真剣に考えなければならない」と仰っています。

とにかく教会ぐるみで、若い人を学生層を育てていくことに真剣に取り組まなければならないでしょう。

その一番の理想は、少年会の頃から順序よく育ってもらうことで、少年会という基礎時代に、しっかりと喜びの心、教祖の御心、ご守護を感じる基礎づくりをしていくよう、心がけなければなりません。

小さい時から言われ続けてきたことは、分っても分からなくても何となく心に残っていく、そういうことから、神さんを身近に感じられるように働きかけることが大切です。

「若い者より来る処厄介。世界から見れば厄介。なれど道から厄介ではない。道から十分大切。十のものでも九つ半大切にして半分だけでけん。十のもの半の理で九つ半まで消す。よう聞き分け。」というおさしづがあります。

外に向かって、九つ半、一生懸命、にをいがけ・おたすけをしていても、残りの半分、内々の丹精、道を繋いでいく若い者の育成を蔑ろにしたら、道が切れてしまうでしょう。

さらに続いて「年のいかん者、我が子より大切。そうしたなら世界からどういう大きい事になるやらしれん。」とお聞かせいただきます。

お道では十五才が一つの大きな転機です。

十五才までは親の責任・親のいんねん、それ以降は本人の責任です。

また、十七才になったら「別席」も運べるし「修養科」へも入れ、「おさづけの理」を拝戴することが許されます。

ということは、親神様からすれば、教えがしっかり心に治まる年、すなわち教祖の道具衆としての御用ができる年だということですから、この時期を逃すことなく、私達は、お道の信仰をしっかり伝えていかなければと思います。

ではこの厄介な学生層にどのように接して、どのように教えを伝えていくのかということで、学担で研究して生まれたのが「ＨＡＲＰ(ハープ)」(心が目覚めてくる再生のプログラム)という手法です。五～八人の小グループで与えられた課題を相談しながらこなし、その中でお道の教えを自分達で勉

強し身につけていく――また同じ年代の者が話し合うことによって心を開いてお道の教えが入っていく――というような手法です。

学担の行事ではＨＡＲＰを多く取り入れて推し進めています。この手法を通して学生が自ら考え、一つきっかけを持ったらコロッと変わってきます。

今までお道にそっぽを向いていた学生が、この手法を通して、「お道ってまんざらでもない」と思ってくれたら、彼らの実行力・実践力には凄いものがあります。

この手法を取り入れ、一週間おぢばで合宿体制で、教理を勉強し、ひのきしんを実践するのが「学生生徒修養会」（春に大学の部、夏休みに高校の部を開催）です。基本的な内容は講義と修練ですが、年々受講者も増えています。

この一週間で感激して多くのことを学び、キラキラと輝きながらお道を求め、お道の素晴らしさを身に付けて帰っていってくれます。

どうぞ全ての教会から受講生が得られますようお声掛けをお願いします。

この他にも学生を対象とした行事・活動を、本部・教区・支部でもしています。先ず、そういう行事に学生達を誘うこと、その為にもしっかり日頃から声をかけていただきたい。学生達がこうした行事に参加することによって、お道の教えを身につけていくことは確かですので、とにかく行事に送り込むことに力を入れていただきたい。

真柱様は昭和五十七年の年頭のあいさつで「親神様から預かった自分の子供を、一人残らず道を通ってくれるような子供に育てよう。漠然とではなく、縦の伝道を再認識し、自分の子供にこそしっかりと信仰の道を通ってくれるように仕込むということをお互いの責任と認識したい。どれだけたくさんの子供を授かっても、その子供達がこの道を通らずしては、をやの心には応えられない。信念をもって我が子を同じく教え子として立派に道を通ってくれるよう指導することは、親として一番関心をもって力を入れなければならない問題で、新しい道の友を引き寄せること以上に大切だ。」と仰いました。

若い人を育てることは非常に難しく時間のかかることですが、あるとき、真柱様は「お道の人材育成の精神は、育ってほしいと思う人を親神様が育ててくださるように尽くすことであって、人が人を育てるのではない。具体的にいろいろと心を配り手をつくすことも必要だが、それが伝わるか伝わらないかは、伝える側の誠真実が最も大切だ。育ってほしい、わかってほしいと願い、実行する誠真実が親神様にお受け取りいただければ、親神様がお働き下さる。おさしづに『育てば育つ。育たにゃ育たん』とあるように、育てようという心がなければ育つ道理がなく、育ってほしいという心を親神様に受け取っていただきたければ、育成する側の者もそれだけ成人の努力が要る。さらにおさしづに『道に外れたる心で育てようと思うたところが育たん』とあるように人間思案や損得計算で考えても育たない。教祖のひながたを考え、道の御用のために育ってもらいたいと願って、ただ自分の悟りや信念を若い人に話すだけではなく、自分も一緒に通ろうという姿勢が大切だ。」というふうに仰いました。　**《以上要約》**

教祖百二十年祭
学生おぢばがえり大会へは
各教会から一名以上の参加を

教会長講習会

去る、二月二十六日・二十七日と笠岡詰所を会場に、教祖百二十年祭へ向う三年千日と仕切っての年祭活動仕上げの年にあたります今年の教会長講習会を〝『実を上げてこそ、仕上げの年』とお聞かせ頂く今年、御存命の教祖にお喜び頂ける成人をさせて頂く〟の主旨の下、表統領・本部員飯降政彦先生、伊都分教会長岩井喜一郎先生のお二人をお迎えして開催し、百十四名が参加しました。

開講にあたり、大教会長様は、「講話を聞いて、ただ素晴らしかった、良かったで終るのではなく、今年一年の歩みにつなげて講習会の意義がある。特に、理のお運びをされて表統領のお許しを戴かれた飯降先生にお越し頂いたと云うことは、真柱様の代わりにおつとめ頂くのと同じであり、聞かせて頂いた以上は、仕上げの年に相応しい結果を出させて頂かないと、昨年と変っていないではないかでは困るのであって、間違いなく成人の歩みをさせて頂くよう精一杯つとめさせて頂こう」と、理を受ける心構えと発奮を促されました。

本部講師 飯降先生は、「よふぼくの拠り所は教会である。教会がよふぼくにとっての拠り所になっているだろうか、教会へ行けば、自分が人生に行きづまり、迷った時に全てを吐き出して再発見が出来るだろうか、教会へ行けば自分が信仰者として何をしたらよいかわかる、教会へ行けば教祖の話が聞ける、それが出来ない教会になったら大変である。又、教会はほこりの溜る所である。特に教会長の奥さんの立場はほこりをいっぱい吸い易いため、身上になるケースが多い。だから、おつとめに依って、懸命にほこりを払うことが信仰者の大切な角目である」とお話下さいました。更に、「教祖の年祭は仕切って成人することであるが、それは自分達の信仰の拠り所を確認することであり、それはとりもなおさず、教祖がお姿をおかくしになられた元一日が拠り所であり、教祖御存命の理を自分のものに出来ているかどうかが重要である。」とお話下さり、最後に「笠岡の皆様方、年祭活動の御諭達の精神は、人をたすける心の涵養と実践です。あと十一ヶ月頑張って頂きますようお願いします」と、力強く結ばれました。

第二講の岩井先生は、「徳のない人は出会いが悪い。同じことをしても徳のある人は幸せになる。日本は今、徳のない人が増えてきたのではないかと思う。私は徳のある人生を送って頂くために、徳をつけるということを伝えるのがお道の信仰者の使命ではないかと、にをいがけ、おたすけに廻らせて頂いております。自らの少年時代の体験、子育て、部内教会の修理丹精を通して、この道は、おつとめ、おつくし、おさづけの取次ぎと御恩報じにと、お教え頂いたことをそのまま一生懸命実行すれば必ず神様に受取って頂き、その人の徳分としてお返し頂けるものと信じて疑いません」と、ユーモアと涙を交じえて大変分かり易いとても感動的なお話を聞かせて頂きました。

年に一度、親里で教会長が一堂に会し、出来得ることなら全員が参加して頂き、心をひとつに合わせ、ぢばの理を頂き、一年間を勇んで御用に励んで頂ける源になるような講習会にさせて頂くには、まず一人でも多く参加して頂くこと、ねりあいの内容は、班編成は、講師の人選は、時間配分は、と話し合いを重ねてまいりました結果、身上・高令の為の欠席はあったものゝ、昨年よりは参加増となり、両先生の講話はとても良かったと大多数の方から満足のいく感想を聞きましたが、班編成では、人数・性別・年令・系統等、まだ〳〵配慮が必要と感じました。

今年も少年会活動について体験発表、学生会活動については映像を通して学習しましたが、ねりあいのテーマに「教会の将来像」を掲げていましたので参考にして頂けたのではと思います。十年、二十年後の教会の姿を想い描き、その為には、今、何をどうするべきか、大いに考え、行動すること

が大切なことではないでしょうか。アンケートでも「教会の将来のこと」で悩み・不安を持っている会長さんが85％いると云う数字が出ています。今後の大きな課題の一つであります。

さて、これらを克服するためにも、この講習会を機に、勇み心と実動を加速させ、今年一年の歩みにつなげさせて頂き、悔いのない年祭活動となるようつとめさせて頂きましょう。ありがとうございました。（布教部部長　佐藤道孝）

モスクワ サンクトペテルブルグ 演奏会に参加して④

大教会 岡本久善

バスは、ネバ川沿いを走り、市の中心部へと近づく、車も人も多くなり、この町一番のネフスキー大通りに入ると車は、進みにくくなる。前を見ると、旧海軍省の建物が眼に写る。もう宮殿前広場だ。何と広い広場だろう。世界で最も広い美しいと云われる広場が広がる。全て石とレンガが敷かれる広大な広場だ。広場中央には、アレクサンドリンスキー柱と呼ばれる大きな石柱が立つ。その高さは二十Mを裕に超す高さがある。その尖頭には、背に翼を持ち十字架をかかげる天使が装飾されてある。この石柱を中心に広場は広がり、それを囲む様に半円径に建物が立つ。その建物の巨大さは、〝おやさとやかた〟東右一棟から五棟よりも長く続き、高く、ロシア建築の伝統を基礎に建てられてあると聞く。その壁面は、ロイヤルイエローと云う淡い黄色で統一され、長方形の数え切れない窓が午后二時と云うのに沈みかけた夕陽に照らされて美しい。

バスを降りると「安いよ安いよ」と云う物売りに囲まれ、特産のコハク、木ぼり人形マトリョーシカ、世界三大珍味の一つキャビアと、彼らも一生懸命だ。そうこうしながら、その巨大な建物、冬の王宮、エミルタージュ美術館に入る。こゝの収蔵品は、エカテリーナ二世の収集に始まり、社会主義革命后、王や貴族の宮殿が国有化され、そこに

個人コレクションを加えて、膨大なコレクションを誇る美術館となったとのことである。館内に足を踏み入れると、館内全てが美術品である。入り口正面の間は、三階迄を吹き抜けとした空間と広いスペースを有し、又又白大理石とグレーの石柱とで装飾され、二階へは右側左側の階段共、全て白大理石で、手すりも統一され、舞場は、大理石のモザイクで装られてある。

私は、右側から昇り、部屋から部屋へは全て赤の厚手の絨毯が敷かれてあり、柔かく老人の足に誠に心地よい。美術の知識の薄い私でも、記憶にある。エル・グレコ、ベラスケス、ゴヤ、シャルダン、ゴーギャン、等の特色のある画風が次々と展示され、その絵画の数と大きさに圧倒される。テレビ何でも鑑定団に出品される絵が何とも小さく思える。説明をして下さる「ショーロフ」さん(若いのに猫背で、細身なのでショロケているので私

はそう呼ぶ)は、ジョークを交えて一生懸命説明して下さるが、説明の中に入る洒落が、少しずれる為、笑いがずれ遅れて、拍手がバラ〳〵と起る。こんな説明を聞きながら三十分も歩くと、少々休憩が欲しくなる。所々にある椅子にて勝手に休むことにする。百号、二百号の絵が、広い壁面を一様に、所狭しの感で展示されてあるが、私が館長なら、もっと数を減らして展示するのに、と思える。満腹のお腹に「もっと食え」と押込む感がして、疲れる。年齢の所為だけではない。こうなると先廻りして、少々休むことにする。丸一日ないし二日を掛けて、鑑賞すべきを、二時間で鑑賞するとは、無理なことである。外に出ると夕宵が迫り、薄明りの残る中、バスに乗り込み、夕食へと向う。

確かに、街は緻密に計画された大通、広場、庭園や公園、人々を惹きつける数々の彫刻で飾られ、花崗岩の切石で覆われた川岸と、装飾された数々の橋に縁取られた無数の水路で、巧妙につながれて、美しい街が作られてある。プーシキンの詩は、人々が如何にこの街を愛しているか表現されてある。

我、ピョートル大帝に造られし汝を愛す。
汝の厳そかにて秀麗なる見目を愛す
威容を誇る　ネバの流れを。

A・プーシキン

しかし又、この街が、如何に多くの人々の血と汗によって成るかは、その戦の歴史の中に証されてある。十八世紀初頭の、スエーデンとの「北方戦争」十九世紀、ナポレオンの進攻による祖国防衛戦争、ロシア革命を経て、第二次大戦のナチスドイツとの、レニングラード防衛戦と、全て、この街が戦場であり、特にナチスドイツとの丸三年にわたる攻防戦は悲劇的で、戦后数々の映画の題材とされ、その戦の悲惨さは、世界の人々の知るところである。この街には数知れない人々が争い、数知れぬ人々が眠る街でもあることを忘れてはならない。又これらの戦は、冬の寒さが味方し、全てロシアが勝利することにより、「冬将軍」と云う言葉の由来の元ともなっている。街のほとんどが破壊と云う被害を受けた中、歴史的文化遺産の修復も、長い時間と多大の費用を要したことだろう。それに価する程、人々はこの街を愛し続けるであろう。

《次号に続く》

温故知新

苦労あったればこそ

雲東分教会　三代　昌

年頭早々〝かさおか〟誌の原稿を〝温故知新〟の内容で何か執筆する様と。不肖 私でも〝温故〟の筆ならと御申越しに応へさせて頂く事に致しました。

顧れば道一条七十年 御雛形の万分ノ一はおろか先人の足元にも及ばぬ歩み乍ら 道中おみせ頂きお連れ通り頂きました不思議珍らし御守護の数・思ひ出は尽きません。

別して今日 飛躍的成人をとお仕込み頂くにつけ 心に甦る事は 何はともあれ、助け一条に蒔いた苦労の物種は 必ず大き成人の喜びとなって何時かお見せ頂ける、又その道中でみるであろう節は 親心切なる成人の導きであるんだ等々の証しをマザ〳〵とおみせ頂いた一節であります。

偖て十数年前 名称新設間も無い一日 上級(島根)に帰参した折 一老婦人が如何にも感じ入った口調で、私に「先生 〇〇村の〇〇家は貴方の処(雲

東)へ日参だそうですネ」と申されましたので「それがどうかしましたか 此処(島根)へ参らんのがいかんのですか」と申しますと、「否々そうではありません、誰方が匂ひ掛けなさったです」と。

私は「誰も匂い掛けた者は居ません 先方が自ら助け求めて参って来られたのです」と申すや、一際声を挙げて「アア不思議!!あの○○家は 先生 貴方の幼い時の寝小便から」と

”エ“ とその先を聞く迄もなく、老婦人も然る事乍ら 私自身驚き入ると共に 思ひ浮かぶのは当時四?五才の私、そして生前の母が語った一件でした。

抑、拙宅の入信は百数十年前で 本家の身上に祖父の事情から因縁を自覚した父が一切を納消して道一条に踏切ったのが始まりで、成人と共に助一条を目指して出郷、斯くて小生の生れる一年前に名称設立、後事を委ねられた母は 本家の物置を改造した莫座敷の荒屋に 祖母に私共姉妹入四名を抱え 昼間は針子に和裁を教えて生計とし 夜は五人一丸となって臥と云ふ、正にどん底の態でした。

此様な道中に あろう事か幼い私の毎夜の寝小便です。代替の無い夜具、その始末方に止む得ん半日針子の来宅を断はれば直ちに生計に事欠くので祖母と談合、誰に教はったでなし 私のお尻に灸を据えたから堪りません 近所中へ響く悲鳴を耳にされた会長様がすかさずお越し下され 嫁姑二人掛りで幼児に乗馬よろしく処灸してゐる態を御覧になるや否や 大喝一声「何たる態ぢゃ。お前等一体何処へお話聞いて来た。……自分に都合悪いからとて詮ない子供の身に火を着けるとは!!生計が苦るしからであろうが 主人の上を思ってもみよ。教会とは名ばかり借家住ひの男手一つ子供(長兄)連れて食ふや喰はずのお助け一途、何れ結構頂いて一家一統、一ッ屋根の下で通らして頂くは必定 其時 お前泣いて通り度いのか? 何せ半日子供の寝小便で捨たるものなら 明日と云はずお助けに出よ……」

厳しいお諭し、当時、未成人の母には深い理合は判らぬ乍ら 会長の仰せは神の声と治め 翌日から草鞋を履いて出雲北山の中腹に散在する無信者部落へ匂ひ掛けに運ぶと共に連夜の寝小便は御守護頂きました。

そして 最初に草鞋を脱がして頂いたのが老婦人の申される○○家であり 当方へ助けを乞うて来会下さった家なのです。すでに八十年前の事として ○○家に母のお助け等 識る人はありません。

事別きて 当地方で助けを天理教に乞ふとなれば 知らぬ者もない島根に参上するは当然、然るに 一粁と隔たぬ吾教会(雲東)の新設間もない時、何時新設されたか知る人稀な 新米教会へ 選りも選って救け求めての参上で、然も 私が設立さして頂くのを待ちに待ってたとばかりの入信第一号。

自ら求めての入信とは申せ、早々 三年千日の日参ならぬ朝参りを定められ、その間、三・四日詮ない事情に不参の他は 積雪の中・豪雨台風の朝を北山の中腹から朝勤奉仕にお勤め下されたのには 一同感銘いたしました。

更に 私 取次がして頂く節々の御用にも ”会長!! それ丈は待って呉れ“ の ”考へさして頂き度い“ のとは一度もない素直一筋に 息子の身上御守護は実に鮮かでした。

今日 修養科も了へた用木一家としてお勤め頂いて居りますが 省みて教会長として何もお助けさして頂いてない ○○氏自身で助かり助けて頂かれたのだと存じ、私の道中 斯様な入信なり成人して下さった一家は他に思ひ当りがありません。

是ぞ母よりの賜りものと存じ 道一条通らして頂いたればこその奇蹟と存じられます。

父は 名称設立後十年にして現在地(米府)に当時としては近隣にない神殿附属屋を構へて 宣教所から支教会へと、そして家族一統を迎へ入れました。母は整備された世帯の中へスル〳〵と住込まして頂き 父と苦労を倶にした住込人に伍して何等臆する事なくお相手の勤まる奥様として 通らして頂ける喜びを頂いたのでした。生前「是もお前の寝小便のお蔭、苦しかったけど会長様のお仕込みあったればこそ」と 今の喜びを語って呉れました。

通って置け 先で分ると仕込まれた会長様、それを兎にも角にも受けて通った母、省みれば 先人から「此道 聞く丈の道でない 通った丈の道」ともお仕込み頂いた様に存じますが 通った丈でなく 一粒万倍にお返し頂いて居るのではと存ぜられます。

御神言の一節に「…… 難儀さそう、困らそう親はないで。なれど効能を積ませ 手柄さし度い為 苦労さすのや。苦労せい〳〵 苦るしみの中に実がある、楽々の中に実は無いで ……」と。今日(こんにち)の旬に一入に心に沁みるお言葉であります。

談話室

僕の自転車団参

大教会　谷本光司

此の程、3月3・4日に、6回目の自転車団参を、岡山教区の方々といっしょにさせていただきました。

他の人々は「何をしているの?」とたぶん思うだろう、僕も反対の立場だったら「止めとけぇ」と思う、雨にたたられた自転車団参。

6回中6回雨降ってます。雨男か? 通り方がわるいのか? 行きは30数時間、帰りは高速バスで3時間余り、でも帰らせていただいた達成感が何とも言ない思い。初代の人々は車も無し電車も無し、みんな歩き。僕は初代の人の百万分の一、千万分の一位だと思う。

6回もしているといろいろあるので、思いを述べてみたいと思う。

【1回目】

6・7年前の年末の詰所餅搗ひのきしんバスの中、僕の天理教の師 森本正典さんが「自転車で、もう4・5回おぢば帰りしてる……」と。それがきっかけで始めた自転車団参、40の手習。

最初は5・6年前の4月、海松ヶ岡の方々4・5人といっしょに。僕は完全になめてかかった。300㎞位どういう事はないと思ってた。行けど進めどなかなか天理に着かない。こんなにしんどいものなら止めたいと何度も思った。人に負けるのが嫌い、最後は意地。でも結局、海松ヶ岡の皆さんに迷惑を掛け、足を引っ張った。

やっと着いた天理黒門前。達成感、心を洗われるような気がした。

正典君が自転車を組んでくれた‼正典君はすばらしい人です。正典君がいなかったら今の僕は無い。正典君とよく飲む。飲むと天理教談議。「こうじゃぁねぇといけんと思う……」と正典君は熱く語る。本当に笠岡大教会・天理教の事よく思っている。

【2回目】

その年の5月、笠岡大教会青年会の人々10数人と(青年会長様を笠岡大教会へお呼びするため)。今度は迷惑をかけれないと思い、1ヶ月前位から、自転車で笠岡大教会へ参拝も。何をするのも自転車で、休みを作ってチャレンジ(43才位。43才は、僕のおやじの出直の年)。

5月はもう熱くなりかける。熱い、のどがかわく。10数台の人が自転車でおぢばへ。一人もリタイヤなしでおぢばへ帰らせていただきました。黒門前でみんなで抱き合って喜び、泣きました。

【3回目】

その年の暮れの押し詰まった12月。「光ちゃん、また行くけぇ、つきあう？」と正典君。

「何人位？」

「光ちゃん入れて5人。」

雨が降り出して、うかいやドライブインで休んだ。寒くて、寒くて、5人がコイン精米機の中で暖をとった。

「さみぃ、さみぃ」今でも脳裡に焼き付いていて、神戸の垂水のへんで僕の自転車がパンク。スペアー持ってたんだけどすでに使っていて、スペアーなし。話し合って、僕がリタイアした。

悔しかった。垂水駅に自転車をカギかけて止めてて、自転車を盗られた(後日談)。正典君に申し訳なく思った。

【4回目】

翌年7月末、こどもおぢば帰りのひのきしんで。4回目の自転車団参が1番思いが深いです。

正典君は、いつも僕に「僕が自転車でおぢば帰りするのは別席の人をつれて帰ってる。何もなく帰っても意味がない」と。その一言で決まった。

「何もせんかったらいっしょ。自己満足だ。何かしてみ」と言われたような気がした。僕の苦手な分野……。

4回目はパンフレットを持って出た。2号線から43号線の近くで夜が更けて、寝ようと思い、公園・ベンチ・川辺・駅・寺……、みんな立禁(立入禁止)。神戸の公園周辺はベンチを仕切って、横になれないようにしている。どこで寝ようと迷っていて、43号線沿いで寝ようと思い寝床を探す。

深夜に、ここにしようと思い、寝かけた時に頭のへんで声が聞こえてくる。

「ここは、おれが寝とるから出ていってくれ」

どこでもホームレスの人々。こんな先進国の日本にもそんな人がいるのが不思議。

今まで恐いと思った事のない僕が怖いと思った。世を捨てた人、何をされるか分からない(決して偏見では何い)。1・2・3・4・5・6……だんだん人が増えて来る。

「お兄ちゃん、新入か？新入なら新入のおきてがあるから、あいさつをせぇ」

あいさつ？　寝るのもあいさつが要るのか？　でも僕は、そんな事、今の日本にはないと思ってた。

コンビニでビールを買っていたので「おっちゃんビール飲む？つまみも有るで」

そのうちの1人の人が「どこ行くんなぁ？」

僕は「天理。天理でこどもおぢば帰りというのをしょぉるけぇ、(ひのきしんと言おうと思ったけど)ボランティア。」

「何なぁ？それは」

「こどもが天理に行って、2・3日泊まって、行事をする事。こどもが遊んだり、教理の勉強する事。」

「偉いんじゃのぉ、お兄ちゃん」

「偉うねぇで、むかしは手もつけられんかったけぇ。天理教しょぉるけぇこの位ですんどんじゃぁ」

話をしているうちに、いい人々だと思う。人間はうわべだけで見たらいけないと思った。

「天理がんばって行けぇよぅ」と言ってくれた。

「ここで寝てもえぇで……」

5・6の人々と、43号線沿いに寝た。天理教のハッピをかぶって寝た。金は要らんから、命だけはと思った。

朝出る時に、1人の人が「兄ちゃん、がんばれぇ。楽しかった。」と言ってくれた。その事は心にしみた。

郡山の駅でパンフレットを配って、駅のトイレ掃除をしておぢばに帰った。

【5回目】

翌年10月の笠岡大教会の土持ひのきしんに出るために自転車で出た。

朝から雨、雨の中の自転車。雨がつきまとう。ふつうの時でも体力を消耗するのに、雨の中は余計に体力を消耗する。

２号線で行って、玉島でパンク。「すいませんこのへんに自転車屋さんないですか？」何㎞か歩く。自転車を押して歩いたら、余計体力を消耗する。倉敷市には入ってた。岡山県境の瀬戸パーキングの所で体を休める。

さあこれから出発の時、またパンク。たまたまホームセンターが有ったので、店員に「すいません、自転車パンクなおりませんか？」

「すぐには無理。１・２日位かかりますよ」と言われた。

「いいです。歩きます。」と出た。ちょうどPM８時位だった。ホームセンターが終る前だったので、愛想ない返事されたのかなと思った。

その日も雨が降っていたので、今夜の宿探し。何㎞歩いたか分からないけど、派出所で「ビジネス旅館はないですかと尋ねる。」

日生(ひなせ)の辺ではないかと思う。とにかく灯りのある辺へ行こうと思った。雨は降るし、夜は更けるし、いくら声をしても出てくれない。また、断られた。４・５軒目にやっとビジネスホテルに入った。7000位払った。「うっそぉ！」と思った。

理の親にTELして、「ホテルにチェックインしました。……神様は有るか」と言った。一生懸命に行こうと思っているのに肩透かしばかり。僕は、悪口雑言ばかり言った。

理の親に「神様は見ているよ。光ちゃん、止めて、汽車かバスで行ったら？ 神様は確かめているんじゃぁないの？」と言われた。人生一直線の僕に、柔らかく諭して下さいました。

でも僕は、まだ合点が行かないと思った。「何のためにそんな事せんといけんのんなぁ」と思った。それで僕のもう１人の師、青年会委員長佐藤君にTELした。やっぱりいっしょの事を言われた。心がなごんだ。

翌日に「すいません、自転車屋ないですか」と尋ねたら、２軒とも店たたんでいて、その町には自転車屋なし。国道へ出てたら、「あそこで直していただける」と聞いて、訪ねた。ふつうでは考えられない所だった。車屋の様だった。

「お兄ちゃんどこへ行くの」と言われたので、

「天理へ行く。」――今ではすぐ言える。

「ほう、天理。奈良の？」

「そうです。」

「ここから、まだ200㎞は裕に有るよ。何をしに？」

「ボランティアをしに。」

「何のために？」

「日々の反省かな。」

「日々の反省？ 見たところ、ふつうの人だけど……」

「いやあ、人には言えない事は有るからね」と答える。

そんなやりとりに20分位で(パンク修理が)出来た。有りがとうと言ってお金を払ったら、「こんな自転車乗った事ないから、乗してくれる？」と言われのので、どうぞと答えた。

また有りがとうと言って出ようとしたら、「お兄ちゃん、お茶飲んで行かれぇ」と出して下さった。いいですと言ったけど、僕何にもできんので、お返しをと思って、タイヤを運んでいたので、いっしょに手伝わせていただいた。

パンフレットを渡して、お礼を言って出、その方が「また来ねぇよぅ」と言われた。また来るでと言っておぢばへ向かった。

奈良に入って、N先生に声を掛けていただいたのがうれしかった。「光ちゃんがんばりねぇ！」――でもコーヒー差し入れの方がいいと、今でもN先生をからかう。

紆余曲折、いろいろ有るけど、体が動くまで、人生現役で、自転車団参をさせていただこうと思います。

１人で行くときは、パンフレット・携帯灰皿・ナイロン袋(ゴミ拾い・タバコかすを拾って)・すね当て(回廊拭きのため)を持って……。

最後に、皆さん、僕たちといっしょに、自転車

団参をしませんか？苦しいけど、いろんな事が見えますよ。

教祖120年祭の仕上げの年、また考えてます。いっしょに自転車団参をしましょう。

今年9月、47才になります。こんな僕ですけど、いい出会いをお待ちしていますので、皆さんよろしく。

◈学生会新入生歓迎会

【日　　時】　４月２４日（日）午前１０時～午後３時頃
【会　　場】　笠岡詰所
【対　　象】　おぢば管内の学生
【内　　容】　大教会長様お話･親睦会
※学生には、直接ハガキで案内いたしますが、こちらが把握出来ていない学生もおりますので教会からもお声がけをお願いします。

◈青年会笠岡分会総会

当たり前のように生まれ育ち、暮らしている私たち。
思えば私たちにおかけ下さる使命は、果てしなく大きい。
笠岡につながる天理青年よ、今こそ集え！！
迷うことも、疑うこともなく、ただひたすらにをやの期待にこたえ、世界勇ますあらきとうりょうの若き力を結集し、ここに勇み立ち、
成人の道を共に歩もうではありませんか。

【開催日時】　５月２２日（日）
　９時　　受付
　１０時　　おつとめまなび　式典
　午 后　　にをいがけ
　１６時　　解散予定
【携 行 品】　おつとめ衣、にをいがけが出来る服装
【おつとめ役割】

座づとめ	笠岡分会委員	淺野明教	よろづよ	笠岡分会委員	淺野明教
一、二	直　　轄	森本正典	三、四	福山ブロック	藤井保人
五、六	久松ブロック	中村真人	七、八	髙屋ブロック	瀬良　昇
九、十	上下、府中市	高田一弘	十一、十二	島根ブロック	門脇裕教

◈こかん様に続く会

【日　　時】　平成１７年６月２５日（土）　午前７時３０分　出発
　　２６日（日）　午後５時　　到着予定
【内　　容】　月次祭参拝、別席、基礎講座、参考館、支部長様お話、お楽しみ行事、他。
【対　　象】　１７歳前後の女子青年
【受講御供】　２，０００円（基礎講座他は別に頂きます）。
【携 行 品】　宿泊セット、別席を受ける人は席札を忘れないようにお願いします。

◈各行事に参加ご希望の方は、各ブロックの担当者にお申し込みください

▼うそ

詩（かくしん）

動物より人間の方が
かしこいだって
うそでしょう
動物はうそはつかないよ
人間ってうそのかたまりさ
神様はうそとついしょう
大きらい

人間ってうそのかたまりさ
なぜうそつくの
なぜ人をだますの
ほんとの事を云おうや
ほんとの心で話そうや
はだかになれば
皆んな同なじさ
生れた時も　死ぬときも
みんな同なじさ　無一文
自分だけが
なぜそんなにかわいいの
やさしい心で話そうや
やさしい心ですごそうや

二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には「いちれつのこともがかハいそれゆへにいろ〳〵心つくしきるなり」と親心溢れる御守護によって日々結構にお連れ通り下さり陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共は身の回りに成って来る理に世界一列救けたいとの親心を重ねて思案し常に大難は小難に小難は無難にとお連れ通り頂いている事に感謝の念を強くし御恩報じの思いを深めて朝夕に御礼申し上げると共に親心に応えるべくたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております　中でも今年は教祖年祭の仕上げの年として全よふぼくが実動の成果を挙げようとして一丸となって成人の歩みを進めさせて頂いております　その中にも今日の吉日はこれの大教会にお許し下された二月の月次祭を執り行う定めの日柄でございますので只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめさせて頂きます　御前には立春を過ぎたとは言えまだ寒さ厳しい中も厭わず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を声高らかに唱和し改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて諭達でお示し頂くように最近年齢に関係なく我欲に走り安逸に流れがちな人が増えており人の心を失っているのではと思えるような事件も多発しております　そんな時代だからこそよふぼく一人一人がしっかりと成人する意志を持ち後に続く者を育てて行かなければなりません　その上から本日は学生層育成者講習会を開催させて頂きその意志固めをさせて頂く所存でございます　加えて実践にも繋げて行きたいと存じますが実のなるものにする為にも親に喜んで貰うべく年祭に相応しくしっかりとひながたを見つめ人間思案を断ち切って神一条にたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂く覚悟でございます

何卒親神様には親孝心一筋に精一杯勤めきる皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に自由の御守護を賜り人々の心が真実の親心に触れ助け合いの心に立て替わってお望み下さる陽気づくめの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

▼養徳社発行『陽気』誌三月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「先」、選四十五句中、笠岡に繋がる教友の方一名、一句が見事選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

準秀詠　東悠分教会長夫人　田林　美智子

一れつに先は楽しや真の日々

▼出直し　東濱　十三雄

叫ぶ声に　導びかれつつ来てみれば
あゝ又夢か　亡き父の声

寒椿　ポトリと落ちて　母は逝く
九十余年の　苦楽を忘れ

教友の静かな出直し　耳にして
無言のまゝで　手を合わすなり

▼川柳　若き日の思い出　油木分教会　黒瀬　修弍

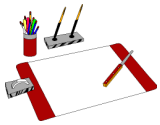
喜びは真似も受け取る親心
未熟でも真似ならできる私にも
にが手でも親の思いにあわす日々
押えてもかなわぬ虫の居りどころ
お手入れに心定めて虫下し

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@kcv.ne.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

実践項目集計（1月）

百万軒にをいがけ	６５,９９５軒
おさづけのお取次	４,０２５回
身上事情お願い	７４６件
提出教会	１１６ヶ所

大教会だより

◎第七六四期修養科
自　立教168年12月1日
至　立教168年2月27日

＊教養掛
三ヶ月間　中島誠治（鶴山分教会長）
一ヶ月目　渡邉眞次（品治分教会長）
二ヶ月目　中村義太郎（大教会役員）
三ヶ月目　藤本芳久（東水島分教会長）

＊修了者
稲倉廣田真也
上吉野松井浩宣
福勇鳥井裕子

名言&迷言

元来、医者に診て貰うというと、激痛差し迫り、かなりの決断を要して、いよいよ治療して貰いに出向く姿勢が善悪問わず、幼少より根付いた思考である。

今年祭、実動の年を迎える二ヶ月前に端を発する意図せぬおさづけの取次より此の方、日々に於いて正直僅かではあるがおたすけの機に直面し、また出会している事を最近強く感じ取る。一歩前進のスローガンが絶えず頭を過ぎるのであるが、恥ずかしいかな、応対たるや全く幼稚である。

今月に入り、以前から気になっていた歯の治療を受けに、行き付けの歯医者に行ってみた。却って頬が膨れ上がり痛みが増して戻ったところへ、見かねて、医者を紹介し、連絡を取って下さった子。後は事を委ね、通う様になったのだが・・・。何か身上にしるしを頂くと、第一おさづけでことが済む。済まない場合の医者薬で、行くこと自体、強く敗北感を抱くのである。おさづけ＝たすかる。それは幼少期に味わった甘い固定観念への思考の帰結に陶酔するが如く、中々展開へとは踏み出せない。今回、早期治療を思い至っての安易な考えで医者に行った。今までの考えにない事であったのだが、事態は思いもよらぬ方向へと急速に変わっていった。

何時からか心ならずも棚上げして来た諸事に、遅ればせながら、やっと手を付けて行こうと、ひょんな拍子に起こった今回の好事に、眼を啓き、無い知恵を働かせて行きたいと願っている。

待っておられず、押し出されてのことであるが・・・。　（ちょん）